

人間の容れ物を支える

(有)まちのほこり研究室代表取締役
千葉 真弓

まず、子どもの頃のお話をひとつ。私の父の仕事は心臓外科医でした。仕事に手術に学会に、ほとんど帰ってこない父親に腹を立て、子どもの私は「悪い人でも助けるのか」と聞きました。すると父は、「目の前に壊れた心臓があったら全部治す。生き方は本人の責任だ」と答えました。私はそれで納得しました。

ところで、命の容れ物である人体が治ったあと、帰る家、家族、職場、地域という次の容れ物が大事になります。私の仕事の一つは、地域という、人間の容れ物を助ける仕事、地域活性化という仕事です。

宮城県が一番南に丸森という町があります。昭和の終わり、この町の県道に面した古い蔵が、解体されようとしていました。以前町長をしたこともある持ち主は、亡くなる前に、五つある蔵と屋敷と中身、土地を「町のためになるよう使って」と寄贈していたのですが、戦後すぐ閉じられたままの蔵と家は、25年もたって傷みが激しくなっていたのです。ちょっとしたオバケ屋敷状態でした。たまたま通りかかった建築家が蔵の価値を町に訴え、芋づる式に声をかけられた中の一人が私です。私が担当したのは、残された物と蔵屋敷を展示空間にするプランです。実を言えば、紫外線も風も遮断できない一般家屋は展示施設に向いていません。ですが、このお屋

敷、私が最初に見たときは、さっきまで人がいた状態の、そのまま二十数年がたった不思議な生々しさがありました。こういった、気配を展示することが出来たら、設備の整った展示施設とは違った魅力を打ち出せると思ったのです。モノの置き方、照明の当て方の演出は、博物館の手法と言うより、美術や演劇の手法が取り入れられています。町の人から聞き取ったお話は、時にイベントでのお芝居になったり、ジオラマの人形になっています。モノに物語を託したこの施設、「齋理屋敷」は、幸い評判を取り、多くの方がおいで下さるようになりました。

すると、面白いことが起きました。よそから人が来ると、町の人々の心の背骨がしゃっきり伸びるのです。自分の出身地を聞かれ、「仙台の近く」ではなく、丸森と通じることの嬉しさは、町の中にいる人にも、離れて暮らす人にも、力になります。またこういう力が町を支えるのです。観光化の効果という、何人のお客が来てどのくらいの収入があったという話になりやすいけれど、一つの施設が核となり、町の名前をきちんと覚えてもらえる、町の人々が自分たちのまちに誇りを持つことは、町を生きかし、町の中に生きる人を守る力になります。

皆さんが御存知の通り、私が住む宮城を含め、東北は東日本大震災に見舞われました。家、家族、職場、地域が壊れたなかで、人的震災はなおも進行中です。

私が手がけているもう一つの仕事は、郷土史の漫画です。『河北新報』の日曜第二朝刊『かほピョン子ども新聞』に、隔週1頁連載のフルカラーです。ふるさとの町は壊れ、帰れなくなり、歴史的景観が失われても、歴史そのものが消えてしまったわけではないよ、と語ろうとしています。町の名を知っていただくと町の人々が元気になるように、東北の歴史に興味を持って戴くと、私たちは気持ちが上向きです。ふるさとから離れざるを得ない人たち、受け入れてくれる方たち、興味を持って下さる方たちのため、この漫画には無料HPがあります。ご一読戴ければ有り難く存じます。



blog.kahoku.co.jp/dokuganryu-masamune/

Navi委員会からの質問

Q2. 高校時代は文系、理系、その他系どのコースにいましたか？

A2. 高校の頃にはまだコースが別れていなかったような気がします。進学校でしたが、私はのんびりしていました。大学付属の小中学校と進み、高校だけ女子校で、古巣に戻るよう教育大に入り、小中学校時代、学校に研究授業にいらしていた大学の先生方と再会しました。

Q2. その職業に就こうと決断した時期はいつですか？

A2. 職業は、中学、高校、大学時代から作品が仕事になり、それをきっかけに在学中から仙台市、宮城県の各種委員を拝命しています。絵の仕事は小学校五年生の時から、胸部外科手術の論文や教科書の挿図を書いています。まだこの世に存在しない装置、人工心臓や新しいペースメーカーを、研究者の納得のいくまで描き直す採算度外視の仕事は、プロの絵描きはかえってやりにくいようです。父と子、5年生だから出来た仕事でしょう。私の絵の基礎はここです。丸森とのおつきあいはじめ、その都度その都度の仕事が、次の仕事につながりました。現在はこのほかに、研究機関や大学との仕事があります。

道草を真剣に
食っていたら
道になりました。